

### 第3回 International Observership in Hepato Biliary Pancreatic Surgery

国立長寿医療研究センター外科  
北川 雄一



私は日本肝胆膵外科学会の第3回 International Observership in Hepato Biliary Pancreatic Surgery の留学生として、2000年4月から2001年10月まで、Virginia Mason Medical Center (Seattle, WA), UCLA Medical Center (Los Angeles, CA), Mayo Clinic (Rochester, MN) の3施設の Division of General Surgery へ留学させていただきました。このような留学は名誉なことであると共にきわめて貴重な機会です、誰でもが経験できるわけではありません。このような貴重な機会を与えてくださいました高田忠敬先生、川原田嘉文先生はじめ肝胆膵外科学会の諸先生方、ホストとなってくださった施設の諸先生方、二村雄次教授以下名古屋大学腫瘍外科の諸先生方に御礼申し上げます。

ちょうど私の留学中に日米とも景気が後退していく時期で、9/11のテロ事件を筆頭に、「えひめまる」事故、カリフォルニアのエネルギー危機、不明瞭な大統領選挙、大企業の不正経理など暗いニュースが多かった時期でした。しかし留学そのものは、大きなトラブルもなく（小さなものはいくつか）過ごすことができました。

このプログラムは、日本肝胆膵外科学会による、膵臓外科の臨床を学ぶという目的のものでした。臨床といっても、米国の医師免許のない我々には実際の practice はできないため、手術見学と臨床研究が目的でした。また全般的なこととして、日米間には保険制度・病院のシステム、手術適応、術式、術後管理に「差」があります。現在では多くの分野において、アメリカ流が「世界標準」と考えられていますので、そのアメリカと我が国との「差」を理解することも、個人的な目標として留学してきました。

Seattle の VMMC では、PPPD で有名な Dr. Traverso のもとで学びました。ここでの研修が3カ所中もつとも厳しく、チーフレジデントと毎朝6時前から回診を行い、その後 conference (毎日)、その後月・水は7時半から、金は8時半から手術、他の2日は9時から外来見学でした。手術または外来の終了後に回診し7時から8時頃に終了するというのが日課でした。Traverso が On-Call の日には、ER の臨床もレジデントと共に経験しました。夕方、手術・外来の空き時間・週末を使って、IPMT (Intraductal Papillary

Mucinous Tumor) の臨床研究を行いました。この Topic は 2001 年 Pancreas Club Meeting および 2002 年アメリカ消化器外科学会 (SSAT) の Presidential Plenary Session で発表させて頂き、その後 Journal of Gastroenterological Surgery に掲載して頂きました (Yuichi Kitagawa, Trisha A Unger, Richard A. Kozarek, L William Traverso. Clinical study of Intraductal Papillary Mucinous Tumor (IPMT) of the pancreas-Predictor of Malignancy and longer survival-. JGastroenterolSurg 7: 1 2-19, 2003)。また名古屋大学第1外科・腫瘍外科の IPMT とアメリカの IPMT との比較研究も行い、2002 年 World Congress of Gastroenterology で発表させて頂きました。

UCLA では、Dr.Rever のもとで週3日の膵臓外科の手術見学、週2日の外来見学、週2回の conference への参加を行いました。UCLA は Visa Status の関係から、病院データへのアクセスが制限され、臨床研究を行うことが出来ませんでした。この Visa の問題が私の留学中のもっとも困った問題となりました。

Mayo では Dr.Sarr のもとに留学しましたが、Dr.Sarr 自身は現在ではヒトの膵臓の手術は現在行ってみえませんが (obesity の手術と消化管運動の基礎研究 (イヌの PD など) をやってみえます) でした。このため週2-3回 Dr.Farnell の膵臓の手術見学、週2-3回 Dr.Nagorney の肝胆道系の手術を選択して見学し、手術 schedule に合わせて、鏡視下・内分泌など他の General surgery の手術を見学しました。また後半には Dr.Farnell の指導のもと、Pancreatojejunostomy の Leak に関する臨床研究を行いました。

この留学で有意義だったことは、実際の臨床の見学や臨床研究で得た知識だけでなく、それぞれの分野での専門家・世界的権威と知り合う機会を得たということです。また米国の外科医の臨床・研究に対する厳しい姿勢を目の当たりにして、奮起している次第です。とくに米国のチーフレジデントの厳しい臨床生活、常にエビデンス・文献に立ち返って臨床を考える態度と豊富な知識、プレゼンテーションやダイベートのテクニックには深い感銘を受けました。現在帰国後約2年が経ちますが、留学中に得た知識を活用し、臨床及び研究を行っております。また年2回以上の英語での発表と年2つ以上の英語論文執筆を自分に課しております。